慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	クライストの政治関連著作について
Sub Title	Zu Kleists politischen Schriften
Author	橘, 宏亮(Tachibana, Hirosuke)
Publisher	慶應義塾大学独文学研究室
Publication year	2011
Jtitle	研究年報 (Keio-Germanistik Jahresschrift). No.28 (2011. 3) ,p.103- 125
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN1006705X-20110331-0103

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

クライストの政治関連著作について[1)]

橘　宏亮

1．目的

ハインリヒ・フォン・クライスト（1777 ～ 1811）は、政治的な題材に関する自身の見解を多くの作品で語っている[2)]。当時ナポレオン率いるフランスは、オーストリアとプロイセン以外のほぼ全てのドイツ諸国を支配下に入れていたが、これに対するオーストリアの抵抗との関連で愛国主義の気運が高まっていった 1808 年の後半から 1809 年にかけてこの傾向は特に強まり、ちょうどこの頃にパルチザン闘争を題材とした戯曲『ヘルマンの戦い』やプロパガンダ的、愛国主義的要素の色濃いいくつかの詩と散文作品が書かれる。このような事情もあってクライストと「政治」というテーマが論じられることは多いが、この点に関して二つの納得しかねる見解が有力に語られている。一つはクライストがシュタインやシャルンホルスト、グナイゼナウらプロイセンの改革者達と同様に、実際に当時のドイツの国情を憂いていた進歩的愛国詩人だとする説、もう一方は、先に述べた 1808 年から 1809 年にかけて執筆されたプロパガンダ的、愛国主義的な諸作品は、ある特殊な時代状況、あるいはクライスト個人の特殊事情（経済的困窮）に起因して生まれたものであって、他のクライスト作品とは一線

---

1) 本稿は筆者の修士論文 Die unendliche Erweiterung der Gemeinschaft durch Krisen. Ein Interpretationsversuch zu Heinrich von Kleists „Prinz Friedrich von Homburg“の一部を日本語訳の上まとめたものである。

2) Kleist-Handbuch. Leben-Werk-Wirkung, hg. von Ingo Breuer, Stuttgart/Weimar 2009, S. 268.

を画する、つまりここには何か彼の本質的要素とは異なるものが描かれているという説である。まずはそれら誤っているであろうと思われる説を確認し、それとは異なる、クライストの政治的著作の本来の意義に少しでも迫ろうというのが以下本稿の目的である。

２．「1809 年の政治的著作」

クライストの作品の中に、多くの全集で「1809 年の政治的著作」などのカテゴリーでもってくくられている一連の作品がある。無論このように銘打ってあるかぎり、そこで扱われているのは政治的な事柄であって、クライストにおける政治を考える場合、彼の戯曲や小説だけでなく、これら「政治的著作」の考察も不可欠となる。よってまずはこれらを見ていきたいのであるが、それにしてもこの命名による分類は何を意味しているのであろうか。政治的な作品を、芸術観などを扱う作品と分けて扱うというのは理解できるが、しかしここに「1809 年」という限定まで付くと一種奇妙な印象を受ける。無論この命名にはそれなりの理由がある。まずこの点について、これらの作品が生まれた背景も踏まえつつ、若干説明する。

繰り返しになるが、戯曲『ヘルマンの戦い』や詩も含めた一連の政治的作品は、1808 年の後半から 1809 年にかけての一定の時期に集中的に生まれており、これらは全て 1809 年 4 月に勃発したオーストリア・フランス間の戦争という時代背景と直接関連している[3)]。当時プロイセンとオーストリアを除いたほぼ全域を支配下に置いていたナポレオンに対してオーストリアが抵抗戦争を試みる。単独でフランスに挑むのは無謀ともいえたが、オーストリア政府はプロイセンの参戦に加えて、ドイツ国民の自発的な蜂起を期待した。同じ頃ナポレオンはスペインにおいてこの民衆の自発的なゲリラ闘争に苦しめられており、その知らせを受けたオーストリアとプロイセン政府の上層部は、ドイツでも同様の民衆による蜂起、パルチザン闘争が起こることを願った。そしてこれを促すためにオーストリア政府が

---

3) 以下歴史的背景やクライスト自身の伝記的事柄については、大部分を Hermann F. Weiss, Funde und Studien zu Heinrich von Kleist, Tübingen 1984 および Jens Bisky, Kleist. Eine Biographie, Berlin 2007 によった。

大々的に展開したのがプロパガンダである。この目的のために詩人も動員され、戦争が始まった 1809 年 4 月には「オーストリアの全ての優れた、あるいは中程度の作家は、パンフレット作成に参加すべし」[4] という政府の指令さえ出ている。新聞や雑誌向けの愛国主義的な詩や、ナポレオンの支配下にあったドイツ諸国、つまりライン同盟諸国をオーストリア軍が行軍する際、そこにいる住民に向けて配布するためのビラやパンフレットが、こうした作家達によって作成された。このようないわゆる御用詩人の代表的な例として、政府に役人として雇われていたフリードリヒ・シュレーゲルや抒情詩人にして劇作家のハインリヒ・ヨーゼフ・コリンが挙げられる。クライストは、ブルク劇場に対して太いパイプをもっていたこのコリンに自身の作品のウィーンでの上演を依頼し、また愛国的な詩をいくつか送っている。

クライストの「1809 年の政治的著作」、あるいは『ヘルマンの戦い』やその他の詩もまさにこのオーストリア政府によるプロパガンダ戦略のコンテクストの中で生まれたものである。1807 年からドレスデンに滞在していた彼の交友関係の中には愛国主義的でナポレオンに敵対的な人物は数多くいた。その代表例としては当時オーストリアの在ドレスデン代理行使を務めていたヨーゼフ・フォン・ブオール＝ミューリンゲンや、バークの『フランス革命の省察』の翻訳者で当時ドイツの保守的知識人の代表的存在であったフリードリヒ・ゲンツなどが挙げられる。特にブオールは、クライストがドレスデンに着いた当初から彼を支援し、オーストリア政府のプロパガンダ作戦に動員しようと尽力した[5]。このようなブオールを中心としたサークルに出入りする中でクライストはオーストリア政府の企図を知り、いわゆる政府の御用作家として、自身の著作でもってそれに参画しようとしたのである。彼は、オーストリアの敗戦が濃厚になった頃、パルチザン闘争の促進を目的とした「ゲルマーニア」という名の雑誌の刊行も計画し、オーストリア政府に支援を要請しているので、一部の作品はこの雑誌のために書かれたようである。こうした事情で生まれた作品であるだ

4) Weiss (wie Anm. 3), S. 193.
5) Ebd. S. 195-196.

けに、そこではドイツに対する愛国心、ナポレオンへの憎悪が熱狂的にうたい上げられ、自発的な民衆蜂起の促進、総動員という目的のためのプロパガンダという様相を呈している。以下それらの作品の中の一つ「子供と大人のためのドイツ人教理問答―スペイン人教理問答の例にならって―」からの一節を紹介する。

(……)
問：それでは、―　各個人の義務とは何であろうか？
答：高潔なチロルの人々がそうしたように、他の人に直接例を示すのさ。それでどこであろうとフランス人に遭ったら殴り殺してやるんだ。
(……)
問：もし神によって多くの財産を恵まれた人がいたとして、行われている戦争を継続するためにその人が他にしなければいけないこととは何であろうか？
答：それなしでもやっていけるようなものを自分の負担で差し出さないといけないよ。
問：それなしでもやっていけるようなものとは何であろうか？
答：生きていくのに必要な水とパン、それと着ないといけない服以外全部さ。
(……)
（DKV, III S. 488-489）[6)]

似たようなことは、戯曲『ヘルマンの戦い』においても主人公ヘルマンに

6) クライスト作品および手紙からの引用は Heinrich von Kleist. Sämtliche Werke und Briefe in vier Bänden, hg. von Ilse-Marie Barth, Klaus Müller-Salget, Stefan Ormanns und Hinrich C. Seeba. Frankfurt a.M. 1987-97（以下 DKV、巻、頁数で示す）による。ただし雑誌「フェーブス」掲載の作品は Phöbus. Ein Jounal für die Kunst, hg. von Heinrich von Kleist und Adam Müller mit einem Nachwort und Kommentar von Helmut Sembdner. Hildesheim/Zürich/New York 1987（以下 Phöbus、頁数で示す）による。訳文は筆者のものである。

よって語られる。

つまりだ、いつか君たちに話したとおり、
女子供をまとめて、
そしたら彼らをヴェーザー川の右岸に連れて行く、
君たちの持っている金や銀でできた食器類は
武器として使うために熔かす、真珠やら宝石の類も
売るか、質入する、
君たちの耕地も荒らして、家畜は殴り殺す、
土地も焼き払う、
君たちにその覚悟があるなら私は君たちの見方だ。
（DKV, II S. 461）

なお先に引用した「教理問答」の中でクライストは、「愛国心について」という章を設け、父の「なぜドイツを愛するのか？」との問いに対して息子に「それが自分の祖国だから」と答えさせる。他の国がどんなに裕福でドイツがいかに貧しかろうとも、祖国だから愛する、つまり愛国心とはいわば定言命法なのである。また「第一の敵」という章では絶対的な敵としてのナポレオンについて説明がなされる。

しかし現実においては、オーストリア政府やプロイセンの改革者達の期待に反し、優柔不断な王、フリードリヒ・ヴィルヘルム三世のせいでプロイセンの参戦は実現せず、さらにクライストが「教理問答」からの先の引用でも言及しているアンドレーアス・ホーファー率いるチロルの農民一揆とプロイセン将校シルによる義勇軍一揆以外には目だった自発的な抵抗運動も起こらなかった。戦争は、1809 年 7 月のヴァグラムの戦いでのオーストリアの決定的な敗戦を経て、結局は 10 月のシェーンブルンの講和によりナポレオンの勝利でもって終結となる。クライストが企画した雑誌「ゲルマーニア」ももはや無用となり、刊行は実現しなかった。

以上が背景であり、一連の政治的著作はこのような特殊事情に直接起因して生まれているので、先ほど述べた「1809 年の」という限定が付されるのもそれなりの理由があるといえる。

３．クライストにドイツへの愛国心をみる説

さて以下、これらの作品に対する解釈で問題ありと思われるものを紹介する。まずは作品内容を素直にとらえて、クライストの中に国粋主義ではないが、祖国への愛国心をみようとする説である。比較的新しく、かつ引用されることも多いクライストに関する研究書と 2009 年に出版されたクライスト・ハントブーフというクライスト研究の包括的な手引書のような本の「政治」という項目で、これを思わせるような分析を展開しているのが、有力なクライスト研究家ヨッヘン・シュミットである[7)]。彼によれば、クライストの根本的な思想は啓蒙主義の批判理念に立脚していて、そこにはエルヴェシウスとヴォルテール、そしてルソーの影響が強く出ているという。クライストは自身の作品においてしばしば、宗教的、キリスト教的な熱狂や狂信、偏見に対する批判的まなざしを示し（ヴォルテール的観点）、また国家や家族に代表される既存秩序や共同体の硬直化、本来の人間性、自然の喪失や腐敗がもたらす悲劇的な結末（ルソー的観点）を描いているが、こういった啓蒙主義的な批判のまなざしこそクライストの詩作の根本動機だというのである。しかもクライストの場合、同時代にロマン主義の潮流が存在し、これに対峙する必要もあった。ただ彼は、自分自身強く魅了されつつも、他のロマン主義者のようにそれに屈することはなかった。結果、ロマン主義的なものに対してもクライストの啓蒙主義の批判的なまなざしは向けられる。しかしそれにもかかわらず偏見、狂信、自然の喪失などを体現する共同体や教会、伝統なしで人間は生活することはできない。反自然的なものは解消不可能であり、真に自然に生きようとする人間は常に悲劇的な結末を迎える、こういったペシミズムにクライストはまず陥ってしまう。結果作品もアナーキーな様相を呈せざるをえない。しかしこのルソー的な、社会や国家への一種の諦め、悲観的なとらえ方を一掃したのが、ナポレオンの登場によって先鋭化した祖国の危機である。フ

---

7) 以下シュミットの見解については、Jochen Schmidt, Heinrich von Kleist. Die Dramen und Erzählungen in ihrer Epoche [2003]., Darmstadt 2009, 2. Aufl. S. 17-39 参照のこと。

リードリヒ大王亡き後の情けない王達によるおそまつな外交、そして1806年のナポレオンとの戦いによる壊滅的な敗北、これによりプロイセンでは国家および軍の改革が急務であることが明らかとなる。この祖国の危機に直面してクライストは今まで諦めをもってみていた国家の問題に真剣に取り組むようになった。国家の改革、再構築を模索するようになったのである。そしてこの時彼に強い影響を与えたのがシュタインを中心としたプロイセンの改革者達である。彼らの試みは「人々をその内面の意識のあり方からして変えようというもので、特権の廃止、あるいは受動的な臣民を、積極的参加を求める市民へと変えるための諸政策により、国民の連帯、国民としての意識を呼び起こそうと企図するものであった。」[8] クライストもまさに彼らと思いを同じくしていた。こういった理念が彼の後年の作品、特に『ホンブルク公子』に強く表れている。ここでは「強権的な、臣民－君主の主従関係に立脚した国家から、生きた共同体への改革」がうたわれている。「そして全ての者が活発な相互関係の中で祖国愛を感じつつこの共同体に参与する。」[9] これがシュミットによるクライストの政治観に対する見方である。この見解にたてば、1809年の情勢をめぐって登場した著作も偏狭なナショナリズムではなく、祖国愛に燃えたドイツ人によるドイツの解放、自由こそが問題になっているのだ、ということになる。こうして最終的にクライストは、フランス革命の輝かしい理想に貫かれた作家とされる。確かにオーストリアとナポレオンとの間の戦争との関連で生まれた政治的著作においてさえも、国粋主義的ともいえる言説の中に、いくつかのリベラルなモティーフ、進歩的なモティーフが散見されるのは事実である。これらは作品の解釈において大きな議論を呼ぶ原因ともなっている。以下いくつか例を挙げておく。「オーストリアの救済について」という著作には次のような発言が登場する。

---

8) Handbuch (wie Anm. 2), S. 270.

9) Ebd. S. 272.

布告

7.

朕、フランツ一世、オーストリア皇帝であり、朕の意志、そして神のご加護によりドイツ人の復興者にして一時的なドイツ人の王である者は以下を決定し、命令する。

１）この決定の日よりドイツ帝国は再び存在するものとする。

２）16 歳から 60 歳までの全てのドイツ人は、この国からフランス人を排除すべく武器を手に取らねばならない。

３）武器を手に自身の祖国を攻撃する者が逮捕されれば、軍事法廷にかけ、死刑でもってこれを処罰する。

４）戦争終結後、帝国議会を召集し、各首長の多数決でもって国体を定めるものとする。

日時

（押印）　フランツ

（DKV, III S. 500-502）

同様の、有無を言わさぬ軍事法廷と進歩的な合議体での国体決定のモティーフの並置は、『ヘルマンの戦い』の結末でも描かれている（DKV, II S. 552-553）。さらに以下おそらくシラーから着想を得たであろう世界市民的とさえいえるようなモティーフが、「この戦争では何がかかっているのか？」という作品に登場し、多くの研究者達を狼狽させている。この戦争ではある共同体の命運がかかっているとし、その共同体をクライストは以下のように描写する。

共同体、（……）詩人達や賢人達の想像力の翼でもって獲得される、その極めて奔放にして途方もない着想にしてもなお、兄弟同胞である諸国民の総体による自由な選挙により選ばれた世界政府の支配に服する。共同体、その正直さや率直さは、友人に対しても敵に対しても等しくゆらぐことなく行使され、隣人の機知でもって諺にもなってしまうほどだが、このような共同体の命運がかかっているのだ。（DKV, III S. 478）

正直さや率直さは、フランス人的な軽薄な機知と対立するドイツ人的特質を意味しているともいえ、そうなるとここに帝国主義的、汎ゲルマン主義的思考を見たくなるのも理解できないことではない。実はこれについてもヘルマンに似たような台詞がある。

> ドイツ人はイタリア人が持っているものよりも大きな
> 素質をそなえているが、イタリア人は彼らのより小さな素質を
> 今この瞬間により伸ばしているのだ。
> もし吟遊詩人の歌の内容が実現し、
> そして一本の王笏のもと、
> いつか全人類が一つになる日がくるとすれば、
> それを振るうのがドイツ人であるというのは考えられる、
> ブリタニア人、ガリア人、あるいは諸君が考える他の民族でもいい、
> しかし天に誓ってあのラテン人ではないのだ！
> 自分達の民族の性格以外には理解し、
> 尊重することのできない彼らではないのだ。
> （DKV, II S. 459）

『ヘルマンの戦い』において最も大きな価値が与えられているのは民族ではなく自由であると考えるシュミットは、かなり踏み込んで、この部分にナポレオンの帝国主義的ヘゲモニーとは対照的な統一ヨーロッパ、その中では個々の国民が自由に自身の素質を発揮できるような国家共同体、カントの「永遠平和のために」で示されるものに通じる理念をみる[10)]。

４．「政治的著作」の特殊性を強調する説

他方これも問題ありと思われるのが、1808 年後半から 1809 年にかけての一連のプロパガンダの様相を呈した作品群を、他のクライスト作品からは一線を画した何か異質なものであるかのように考えてしまう見解であ

10) Schmidt (wie Anm. 7), S. 152-153.

る。既にみてきたようにこれらの作品はその時代前後の特殊な歴史的背景の中で書かれたのは間違いないので、このような説が主張されるというのは理解できる。この説をほのめかしているように思われるのが、筆者も、作品の時代背景を説明する際に大いに活用した『ハインリヒ・フォン・クライストに関する新たな発見および研究』という本の著者であるヘルマン・F・ヴァイスである。彼は 1980 年代に「この戦争では何がかかっているのか？」のクライスト自身による手稿を再発見し、さらにそれまで全く知られていなかった作品「ザクセン王のドレスデンからの出発について」の手稿を発掘したことでも知られ、この本とともに彼が書いたいくつかのクライストの政治的著作に関する論文は、クライストと「政治」が語られる際、必ずといっていいほど参照されるほどの、絶大な影響力をもった研究者である。彼は「ドレスデンにおけるクライストの政治化」[11] ということを述べるのであるが、確かにクライストがこれらの政治的著作を書き始める 1808 年後半とそれ以前の時期の彼を比べると、驚くべきほど大きな、かつ急激な志向の変化が見て取れなくない。むしろ 180 度の転向のようであり、これを説明するには、先程言及したクライストの周辺にいた愛国主義的、反ナポレオン的人物達の影響だけではどうも足りない、とヴァイスは考えているようである。まずこの急激な変化について若干説明したいと思う。

1807 年のプロイセンとフランスとの戦争の最中（これがプロイセン軍どころか国家そのものにとって壊滅的な結果をもたらした）、政治犯、スパイの嫌疑でフランスに拘留されていたクライストであったが、敗戦国プロイセンにとって極めて厳しい内容（莫大な賠償金や領土の没収）となったティルジットの講和でもって戦争が終結した後、彼も釈放され、1807 年 8 月から当時ドイツにおける芸術の中心地（特に絵画芸術に関して）であったドレスデンへと移り住む。ザクセンは、プロイセンとフランスとの戦争の結果、いわば漁夫の利のような形でプロイセンが失った領土の一部を獲得し、かつナポレオンの大陸封鎖によって自国経済も潤っていたのであるが、そのことが芸術にもプラスに働いていたのである。そこでクライ

---

11) Weiss (wie Anm. 3), S. 195.

ストは、今後は自身の著作のみで生計を立てていこうとの決意のもと、ポツダムでの軍務時代からの親友であり当時同じくドレスデンに滞在していた軍人リューレ・フォン・リーリエンシュテルンやエルンスト・フォン・プフーエル、そして国家理論家にして美学者、さらには外交官でもあったアダム・ミュラーとともに、「フェニックス」という名の自身の出版社立ち上げを試みる。この出版社の理念についてクライストは腹違いの姉ウルリーケへの手紙の中で、「この試みはリベラルな諸原則に基づいている」（DKV, IV S. 388）と述べているが、クライストが実際試みようとしたことをみるとこれは本当であったらしい。なぜなら彼は、「1804 年から発効し、」そして「1808 年 1 月からはヴェストファーレン王国（ナポレオン支配下にあった「ライン同盟」の一員）でも適用されることになっていた」、『ナポレオン法典』（『フランス民法典』）のドイツにおける独占的な出版の権利獲得を目指していたからである。この法典自体は進歩的な内容であり、ヴェストファーレン王国は、「1807 年 11 月にドイツでは初めて憲法を制定した国である。それは法の下の平等や信教の自由を保障し、また貴族の特権および課税免除や農奴制も撤廃された。」[12] このような計画をクライストが抱くようになった背景には、当時、在ドレスデンのフランス人大使であったジャン＝フランソワ・ブルゴワンの存在がある。彼も、「フランス抑留時代から自分（クライスト）に興味を抱き」（DKV, IV S. 391）ドレスデン時代からは、反ナポレオン的なオーストリア人行使ブオール同様、クライストの著作活動を支援した人物の一人であった。クライストは、この人物の協力によって、自身の出版社での『ナポレオン法典』の出版、さらにはその出版社にフランス政府御用達というお墨付きの獲得さえ可能であると考え、それを望んでいたのである（DKV, IV S. 391）。『ヘルマンの戦い』の作者にして、ドイツ文学史上、ナポレオンに対して最も激しい憎悪を示した詩人の一人でもあるクライストが、よりにもよってフランス政府公認の出版社設立を目論んでいたという事実は確かに驚愕に値する。しかも「この後 12 ヶ月もしないうちにクライストは『ヘルマンの戦い』を書き、フランス人の最後の一人にいたるまで追い出すに至って初めて終結

12) Bisky (wie Anm. 3) S. 296-297.

する解放戦争を人々に呼びかけることになるのである。」[13] 結局この出版社「フェニックス」設立の企ては、ドレスデンに既に存在し、政府から特権を付与されていた出版社の妨害にあい頓挫することにはなる。

しかし「フェニックス」計画の流れの中で、アダム・ミュラーと共同で1808年1月に創刊した雑誌「フェーブス」においても「リベラル」な理念は引き継がれる。以下創刊によせて1807年12月と1808年1月にいくつかの新聞雑誌に掲載された告知記事にそれが表れている。

> 正反対の形式からなる諸々の芸術作品、それらに共通して求められるものは、力、明晰さ、そして深さ、すなわち広く認められたドイツ人の長所だけである。そして諸々の芸術観、それらはいかに互いに異種のものであれ、独自性を備え、自身を弁護することさえできればいいのである。こうしたもの全てをこの雑誌は喜んで受け入れ、入れ代わり立ち代り披露することになるであろう。
> (……) 人間形成の結果は多様でありながらも同じ志をもったきわめてたくさんのドイツ人達の努力で表現されうる芸術、これの方が、我々ドイツ人の性格にはよりふさわしいのである、一様な均整、静かな所有の中、どこかにいまなおある非常に美しい頂のまわりに我々の時代の芸術家達、芸術批評家達を集めるよりかは。迫りくる神の庇護のもと我々は競争をはじめる。全ての者が、できうる限り遠くまでそれを駆り立てる、そしてまた負かされることはない。そこでは誰一人目標に完全に到達することはないが、しかしそれゆえに全ての者が崇高な戦いへの新たな心情をたきつけることができるからである。そこに終わりはない。(Phöbus, S. 612)

この理念に沿う形でクライストとミュラーは相対立する様々な芸術諸潮流を代表する人物達に雑誌への寄稿を依頼している。その中にはゲーテやヴィーラントに加えて、ルートヴィヒ・ティーク、フリードリヒ・シュレー

---

13) Ebd. S. 297.

ゲルらロマン主義者、ドレスデンの考古学者にして古典文献学者のカール・アウグスト・ベッティガー、歴史家ヨハネス・フォン・ミュラー、神学者フリードリヒ・シュライアーマッハー、詩人では他にフリードリヒ・ハインリヒ・ヤコービやジャン・パウルらが含まれていた[14)]。ドイツという言葉が出てきてはいるものの、この列挙だけでも、この雑誌の理念がいかにリベラルであったか示すのには十分であろう。加えて興味深いのがヨハネス・フォン・ミュラーへの寄稿依頼である。彼は当初ナポレオンに敵対的な志向の持ち主であったが、彼との謁見の際その人柄に魅了され、以後ナポレオンの賛美者へと転向した人物であり、ゲンツやアダム・ミュラーは彼を裏切り者とののしっている[15)]。そしてそもそも雑誌「フェーブス」は政治とは無縁の「芸術のための雑誌」であった。クライストは、雑誌の継続が危機に陥っていた 1808 年 12 月に、支援を求めてハンス・フォン・アウアースヴァルトに宛てて書いた手紙で「フェーブス」について以下のように語っている。

> 長い回り道の末ついに私はドレスデンへとたどり着くことができました、私が取り組んでいる、全ての点で政治とは無縁の文学的試みを実行するために。（DKV, IV S. 404）

このように 1808 年後半に『ヘルマンの戦い』を書き始める前までのクライストは、非政治的な雑誌を刊行し、また政治的にもリベラル、寛容であり、その後にみせる極端ともいえる反フランス、反ナポレオン的態度を全く示していないのである。先程示したシュミットの見解に従えばリベラルである点は不思議なことではない、と主張することが可能であろうが、このナポレオンやフランスに対する態度については説明が不十分といわざるをえない。このとき既にプロイセンはナポレオンへの決定的な敗北を経験済みで大変な窮状に陥っていたし、かつクライストが賛美しているドレスデンも親ナポレオンでライン同盟の一員であったザクセンの首都である。

---

14) Handbuch (wie Anm. 2), S. 164.
15) Bisky (wie Anm. 3) S. 297.

この急激な転向を説明するのにヴァイスが持ち出すのがクライストの経済的困窮という散文的な理由である。金銭的な問題は彼に一生涯ついてまわっていたが、今回もそれは同じであった。結局「フェーブス」は、先に挙げた大物達の寄稿が全く得られなかったこともあり、読者の失望をかい、一年で廃刊を余儀なくされる。こうして金銭的な窮状に陥ったクライストにとって、戦争前夜にして、シュレーゲルやコリンのような御用詩人としての道は、確たる未来を保証するものに思えたであろう。さらに後の手紙でクライストは、フランス支配の影響で自作の上演が流れたことを嘆いているが、そのために名声を得る機会を逸してしまったと考えた彼は、ナポレオンへの怒りを募らせた。名声はクライストが生涯求め続けたものでもある。また熱狂的に聴衆に訴えかけるという行為は彼の苦悩を忘れさせてもくれた。こうしてクライストは主には経済的な問題により、仕方なく転向せざるをえなかったのである[16)]。従って「もし有利な状況が継続し、(「フェーブス」における）当初の明るい希望が実現していたならば、クライストがこのように自分の全ての力を祖国のためにそそぐようなことをしたかどうかは疑わしい」[17)]。これがヴァイスの推測である。これに従うと、一連の政治的著作はクライストが望んで書いたものではなく、そこにあるのは彼の本来の姿ではない異質なもの、という解釈に傾く。なおこれらの著作は内容が内容だけに政治的に利用されてきた過去も持つ。一部に進歩的かつリベラルな言説がみられるにもかかわらずやはり第一次大戦中は国粋主義的、帝国主義的な解釈がなされ、第三帝国時代には、国粋主義、民族主義、人種主義的な目的で利用されてしまった[18)]。当時最も多く上演されたクライストの戯曲は『ヘルマンの戦い』である[19)]。結果ヴァイスのいう通り、全体としてこれらの作品は他に比べて、研究がゆるがせになり、特に 1945 年以降は敬遠されがちであった[20)]。しかしこのようにこれらの

---

16) Weiss (wie Anm. 3), S.201-204.

17) Ebd. S. 201.

18) DKV, III S. 1046.

19) DKV, II S. 1099.

20) Hermann F. Weiss: Heinrich von Kleists ‚Was gilt es in diesem Kriege?‘ Eine Interpretation. In: Zs. für deutsche Philologie 101 (1982), S. 161.

作品をクライスト本来のものとは異質なものと解釈すれば、ナチにも通ずる危険な作品は彼本来のものではない、クライストはナチ的な作家ではないのだ、と主張するのには役立つ。もっともナチスとの関係性を断ち切ろうという意図は、これらの作品の国粋主義的性格ではなく、進歩的側面に重点をおくシュミットにおいても感じられなくはない。

５．共通項としての「破壊」、「危機」、「死」
―1809 年「以外」の政治的著作―

これまでも繰り返して述べてきた通り、私は上に示した二説には賛同しない。従ってクライストは、シュミットの指摘するように、フランス革命の自由理念に立脚した愛国詩人、憂国の士ではないと考える。また彼の1809 年前後に書かれた一連の政治的著作はヴァイスがほのめかしているのとは逆に、むしろ彼の本質的部分を如実に表していると考える。これを示すために以下 1809 年のコンテクスト以外で生まれたクライストの政治的言説をみていきたい。そもそもクライストの政治的著作は 1809 年に限られるものではないのだ。これらをみれば 1809 年も含めた彼の政治的言説は、ある共通した理念に貫かれていることが分かる。

まず注目すべきは 1805 年 12 月に友人のリューレ・フォン・リーリエンシュテルンに宛てて書かれた手紙である。これに関しては、1809 年の政治的諸作品との類似性がよく指摘される。ナポレオンへの怒りもはっきりと言明される。第三次同盟戦争の際、フランス軍が中立の立場をとっていたプロイセンの領土内を通過したことに対し、クライストは以下のように腹立たしげに述べる。

> なぜ王はすぐに（……）貴族たちを招集しなかったのだろうか、なぜ彼らに心揺さぶる演説でもって（ただ苦痛の様子だけでもそうするのに十分だったろう）彼の窮状を打ち明けなかったのだろうか。もし、自分達は虐待されている王によって支配されたいか、あるいはそうではないか、これについての判断を彼らの自尊心に委ねさえしていたならば、その国民感情をいくらかでも刺激することができたのではないだろうか。そしてもしこの感動が現れていたとしたら、それは彼らに

説明するいい機会になったのではないだろうか、ここで問題になっているのは通常の戦争ではないのだ、生きるか死ぬかがかかっているのだ、ということを説明するいい機会に。（……）（DKV, IV S. 351）

終わりの部分などまさに「この戦争では何がかかっているのか？」を思わせる。しかしこの手紙には他にも興味深い発言が登場する。

立派なリューレ、君にはまだ誉が星々に掛かっている。そして君はそれを物おじすることなくつかみ、引き摺り下ろすことができる瞬間を逃すことはないだろう、たとえそれが輝かしい音をたてながら落下し、君を地面にたたきつけようとも。なぜならこんな時代にあって、人は美しい破滅以上のものなど当てにすることなどできないのだから。（DKV, IV S. 351）

この前に、クライストは「立派なリューレ」に比べて、このような覚悟があるように思えないプフーエルのことを風刺し嘲っている。クライストの場合、政治的著作に限らず、崩壊や危機、あるいは死が何か美的なものとして描かれるケースは多い。そして今回の発言はクライストが早い段階から繰り返し述べてきた理想、つまり命は捨てる覚悟があってこそ価値がある、という思想を思い出させる。既に 1801 年の段階で、当時の許婚に次のように述べている。

命とは、我々がそれを尊重しない場合にのみ価値あるものとなる唯一の所有物なのだ。それを放棄することができないなどというのは、軽蔑に値する。そして命をいとも簡単に、喜んで投げ捨てることができる人だけがそれを偉大な目的のために役立てることができる。（DKV, IV S. 247）

クライストはこの理想を彼の処女作『シュロッフェンシュタイン家』にも登場させ、またリーリエンシュテルンへの手紙が書かれたのと同じ 1805 年の 7 月、マリー・フォン・クライストに宛てた手紙の中でも繰り返して

いる（DKV, IV S. 346）。自己愛、エゴイズムなどに対する軽蔑、そして死への賛美、これらはまさしく 1809 年に書かれた一連の政治的著作の主要モティーフの一つである。三つの「風刺的手紙」の中でクライストは、日和見主義的なライン同盟のドイツ人兵士、フランス人兵士の伊達男に妊娠させられ、それが彼にとっては遊びであるとも知らず結婚を考えるまぬけな田舎娘、自分の町をフランス人から守ることよりも自身の利益のことばかり考えている不届きな市長を演じているが、彼らの行為も結局は自己愛から発しているものであり、まさしく、リューレの手紙からの最初の引用でクライストが述べている、戦争で「生きるか死ぬかがかかっている」のだという点を彼らは理解していない。クライストが王の演説に要求しているのはこのような危機意識を煽ることである。この意識を欠き、商売や金、つまりは自身の快楽のことばかり考えている堕落した人間が「教理問答」で扱われるが、シュミットが強調しているルソーの影響はここにこそ表れている。なぜならその堕落をもたらしたものとしてまさに自然に反した啓蒙主義的な知性をクライストは攻撃するからである。そしてナポレオン支配下での苦難はこうした状況から人間を目覚めさせる手段として称揚されさえする。

> 問：それではなんのために彼らは、今この時代を支配しているような苦しみに見舞われたのだろうか。なぜ小屋は破壊され、田畑は荒らされるのであろうか？
> 答：そういった財産が軽蔑すべきものであることを彼らに知らしめるためだよ。そしてもっと価値のある、最高の価値をもった財産、神様が人間に贈って下さった財産を求めようという気にさせるためさ。
> （DKV, III S. 486-487）

そしてこうして危機に直面してこそ到達可能な人間像が、「教理問答」の結論部で高らかにうたいあげられる。そこでは、戦争に負けてもいい、多くの人々が死んでもかまわない、それでも抵抗するべきであるとさえ主張される。ドイツの勝ち負けなど問題にならない、と述べられる。

問：なぜか？
答：だって人間がその自由のために死ぬのをみたら神様もお喜びになるからだよ。
問：では神様が嫌うことはなんだろうか？
答：奴隷が生きているということさ。
（DKV, III S. 491）

まさにクライストが若かりし日より述べていた、命はそれが尊重されない限りにおいて価値を有するという理想がここで繰り返されていないだろうか。そして私の考えではここにこそクライストの政治的著作の根本思想がある。真の人間を取り戻すという彼の目的の手段として破壊、危機、それらを最も簡単に生み出すことができる戦争が有効だと感じたからこそ、クライストはこれだけの力を注いでこれらの著作に取り組んだと考えるほうが自然に思われる。その意味でこれらの著作はクライストがもとから抱いていた理想に立脚しているのであり、何も急激な志向の変化がこれらを生んだというわけではない。おそらく 1809 年にオーストリアがナポレオンに抵抗を試みようとした際も、1805 年のフランスによるプロイセンの中立侵犯のときと同様、これを真の人間の姿を覚醒させることができる絶好の機会ととらえていたのではないだろうか。よって私は、クライストをめぐる経済状況が良好だった場合、これらの作品は生まれなかったのでは、というヴァイスの指摘はあたらないのではないかと考える。

６．進歩的要素について

先の「教理問答」からの引用では戦争がもたらす破壊のメリットが述べられていたが、クライストにおいて進歩的なモティーフ、リベラルなモティーフが登場する場合も、実はこの破壊の側面が強調される。それをみるためにここで再び「フェーブス」を取り上げたい。先程雑誌「フェーブス」の理念を語った創刊告知記事を紹介したが、この理念は雑誌第一号の冒頭を飾るクライスト自身の詩においても繰り返される。

プロローグ
おお汝、雷鳴を轟き寄越せ、汝の燃え立つ馬とともに
フェーブスよ、太陽をもたらすものよ、果てしなき天空で！
ホーラたちに身をゆだねよ、汝の周囲ではない、背後でもない
前方に目を向けよ、戦隊が突き進む前方に！
雷を轟かすのだ、それが人々の住む土地であってもかまわぬ、
汝がどの種族のもとで立ち上るか、どの種族のもとで沈むかなどどうでもよい
今はここ、次はかしこ、拳のおもむくままに駆れ
力、力の行使こそ汝を喜ばすのだから
誤ることはない、汝は正鵠を射る、それは地球をめぐる舞踏なれば
物見櫓からも見張りが範を見出さん。　H. v. K.
（Phöbus, S. 5）

これは記事の内容をさらに先鋭化させたものであるといえる（ちなみに告知記事はクライスト、ミュラーの双方の署名入りであるが、大部分はミュラーの手によるものだ、とする説も有力に主張されている[21)]）。記事が述べていたリベラルな諸潮流間の競争は、ここでは破壊を伴った戦争になってしまう。稲妻や戦隊などといった荒々しい言葉が用いられる。そして「どうでもよい（gleichviel、achtlos）」という言葉が示す通り、ここに描かれているフェーブスは、この戦争という緊張状態の中、狂乱、忘我の態で猛進する。さらに「汝がどの種族のもとで立ち上るか、どの種族のもとで沈むかなどどうでもよい」ので、ここでは記事で強調されていた「ドイツ」は問題になっていない。ドイツ志向ではけっしてないし、どの民族に栄光がおとずれようとどの民族に破滅がおとずれようと問題にならないのである。さらに注目したいのが、このような無意識的かつ破壊的な猛進が、それを行うフェーブス当人は意識することなく（なぜならそれに気づくのは一定の距離をとって眺める見張りだから）秩序を伴った舞踏となり、正鵠を射るという点である。リーリエンシュテルンへの手紙の中で死や破壊と

21) DKV, III S. 1218-1219.

美が結びつけられていたのは既に述べたが、ここでも破壊や危機が無秩序な忘我状態、無意識状態を導き、それが舞踏という全く逆の秩序を感じさせる美的な性質のものを生み出す。これこそクライストが求めている理想だったのではないか。雑誌のリベラルな理念も、クライストにとって重要だったのはその無秩序な側面なのである。ナポレオン法典の理念、あるいはプロイセンの改革者達が理想としたものは進歩的なものであり、それは既存秩序の大きな転換を企図するものであった。特権の廃止や関税撤廃、信教の自由など、既存秩序の破壊を伴い、人々に緊張をもたらすものである。クライストが進歩で重視したのもまさにこの点である。人々がこれまですがってきた拠り所を失い、丸裸となり、こうした理性的な判断などが入る余地のない危機的状況の中でこそ、誠実にして wahrhaftig、真なる人間が立ち現れる。無論、既存の身分的差異などは消滅し、そこにいる人間は普遍的な性格を有するものである（「この戦争では何がかかっているのか？」はこの点を言っているのではあるまいか）。クライストが政治的著作の中で述べたかったのはこのことだろう。それに寄与するものであるならば、ナポレオンの法典だろうとハルデンベルクの改革だろうと受け入れられるのである。そして無論この破壊という側面で改革は戦争と共通する。絶対的な敵との戦争こそ最もこの理想にとって有効な手段である。その意味で「フェーブス」のクライストと『ヘルマンの戦い』や「ゲルマーニア」のクライストとの間に断絶はない。そしてこの点は、クライストの政治的作品で合議体が言及されても、多くの場合それは最後に表れ、結局はそこでどのような結論が出されるべきかが語られないこととも関連している。重点は自由主義的な理念にあるのではなく、真の姿を取り戻すために、人が拠り所のない危機的状況に置かれることにあるので、何らかの確たる秩序を形成することは問題にならないのである。それよりかは第一の敵 Erzfeind（DKV, III S. 482）（これはクライストにとってはナポレオンである必然性はなかったであろう。オーストリアの戦争の中で偶然彼がそのようなものとして現れたのである。）、絶対的な敵の永続的な存在や、戦争の継続（『ヘルマンの戦い』や『ホンブルク』の結末）こそが重要になるのである。

フェーブスの突進は無意識的であるからこそ舞踏たりえたわけである

が、ここにはシュミットがクライストの「政治」を語る際、全く言及しない彼の根本的な芸術観そのものが表れている。「マリオネット劇場」では、マリオネットの舞踏は意識から解放されているからこそ優美たりえるからである。クライストの政治観も、結局はこのパラドクスな彼の根本思想と切り離せないもののように思われる。

（慶應義塾大学文学研究科独文学専攻修士課程）

Zu Kleists politischen Schriften

TACHIBANA, Hirosuke

Das Thema ‚Kleist und die Politik' wird bisher viel behandelt, denn er verlieh seinen politischen Anschauungen oft in eigenen Texten Ausdruck; so nicht zuletzt in einer Reihe von propagandistischen, nationalistischen und gegen Napoleon gerichteten Schriften, die in den Jahren 1808 und 1809 und zwar im unmittelbaren Zusammenhang mit der österreichischen Propagandakampagne gegen Napoleon verfaßt wurden. Es ist der hauptsächliche Zweck meiner Abhandlung, die zwei folgenden allgemein anerkannten, doch mir unrichtig erscheinenden Deutungen dieser Schriften vorzustellen und zu kritisieren:

1) Kleist war ein mit der wichtigsten Idee der Französischen Revolution, d. h. der Idee von Freiheit, durchdrungener patriotischer Dichter, der angesichts des von Napoleon in seiner Existenz bedrohten Vaterlandes sich in seinen eigenen Werken aufrichtig mit dem Problem des idealen Staatsbildes auseinandergesetzt hat, d. h. als ein Gleichgesinnter der preußischen Reformer, die durch Abbau von Privilegien und durch Maßnahmen, die aus Untertanen teilnehmende Staatsbürger machten, nationale Solidarität zu bewirken und Nationalbewußtsein zu wecken, also eine neue ideale Staatsordnung in Deutschland zu schaffen versuchten. Deshalb ist das entscheidende Anliegen Kleists in seinen 1808 und 1809 entstandenen politischen Schriften auch Freiheit, wie propagandistisch und grausam sie auch aussehen mögen.
2) Diese politischen Schriften, die gleichsam zwangsweise durch den damaligen ganz speziellen historischen Hintergrund und durch Kleists ganz private Probleme, d. h. seine damalige Geldnot, entstanden, nehmen eine besondere

Stelle in Kleists gesamten Werken ein. Nämlich sind die Ideen, die hier sich ausdrücken, etwas andere als seine eigentlichen und wesentlichen. Bevor er in der zweiten Hälfte des Jahres 1808 das Drama „Die Herrmannsschlacht“ zu schreiben begann, versuchte er den Code Napoléon (Code civil) in seinem eigenen, ausgerechnet von der französischen Regierung privilegierten Verlag herauszugeben. Auch dieser überraschende Umschwung von Kleists Gesinnung selbst kann die Besonderheit dieser gegen Napoleon gerichteten Schriften bestätigen.

Ich bin anderer Meinung. Wenn man Kleists politische Aussagen sowohl aus den Jahren 1808 und 1809 als auch aus den anderen Jahren betrachtet, z. B. den 1801 an seine Vorlobte geschriebenen Brief, worin steht: ‚Das Leben ist das einzige Eigenthum, das nur dann etwas werth ist, wenn wir es nicht achten.‘, so wird sichtbar, daß es Kleist immer vielmehr um die Krise selbst geht; nur in der Krise kann, so Kleist, angesichts des Todes Eigenliebe verschwinden und sich die wahr(haftig)e Gestalt des Menschen offenbaren. Kleist also erschienen der Krieg und der die Krisen bringende Feind nützlich und notwendig, um dieses Ideal zu verwirklichen. In diesem Sinne können die liberalen, progressiven und die geltende Ordnung vernichtenden Maßnahmen, die der Code Napoléon oder die preußischen Reformer begannen, auch zu diesem Kleist eigentümlichen Zweck beitragen. Für Kleist war, um mit Hegel zu sprechen, nur ‚die negative Richtung‘ der französischen Aufklärung wichtig, d. h. die Zerstörung.

Hier in diesen politischen Schriften wird die Krise oder die von ihr geschaffene Bewußtlosigkeit und Handlungsnot auch als etwas Heilbringendes geschätzt, wie in Kleists wichtigsten kunsttheoretischen Schriften, wie ‚Über das Marionettentheater‘ oder ‚Über die allmählige Verfertigung der Gedanken beim Reden‘.